社会のことも、私事(しごと)に。

Annual Report 2025

認定特定非営利活動法人 Living in Peace

社会のことも、私事(しごと)に。

私たちは、すべてのメンバーが仕事などの本分を別に持ち、互いの時間を持ち寄って活動しています。
社会の可能性を信じ、立場によらずその変革も「しごと＝私のこと」とする人たちの力で、
真に平等な機会のある社会の実現を目指します。

世代交代、その先へ

受け継ぎながら、進化し続ける組織

龔 軼群
（きょう いぐん）

2015 年に入会、マイクロファイナンスプロジェクトで活動するとともに、難民プロジェクトを立ち上げ。理事を 1 年間務めた後、2018 年 4 月から 2025 年 10 月まで代表理事。本業は不動産ポータルサイト運営企業の事業責任者。

宮本麻由
（みやもと まゆ）

2020 年に入会、難民プロジェクトの活動に加え、人事・経営企画などバックオフィスの体制づくりにも携わる。2021 年 10 月から 2 年間理事を務め、2025 年 11 月に代表理事に就任。本業は人材育成サービスの法人営業。

2018年4月より創設者・慎泰俊の後任として中里晋三とともに代表理事を務めてきた龔軼群が、任期満了に伴い、
本人の意向により再任（重任）は行わず、2025年10月31日をもって代表理事を退任いたしました。
2025年11月1日からは、正会員総会および理事会の決議を経て宮本麻由が代表理事に就任し、
5名の理事からなる新体制でLiving in Peaceの運営をリードしています。
代表理事のバトンを受け渡した2人が、変わらずに受け継ぐ想いとこの先の進化について語り合いました。

成長とともに組織基盤を整備

宮本：龔さんが Living in Peace に入会してから10年、一番変わったと思うことは何ですか？

龔：私が入会したのは団体結成から8年ほど経った頃でしたが、まだ規模は小さく、入会するメンバーも知り合いから話を聞いた、創設者の慎さんの著書を読んだといったことがきっかけで、Living in Peace を知る機会は限られていました。マイクロファイナンスプロジェクトとこどもプロジェクトはそれぞれ別々に活動していて、共通のバックオフィス機能もなかった。今では広報や経理、人事など団体としてのバックオフィス機能が確立され、プロジェクト間で連携した活動も生まれてきています。企業で言えばスタートアップから中堅規模に成長したところで、組織としての基盤がかなりしっかりしてきたと思います。

宮本：メンバーを広く募集するようになり、より多様なバックグラウンドを持つ人たちが集まるようになったことで、組織を安定的・効率的に運営していく必要性が出てきましたし、そのための仕組みづくりに携われる人も増えてきましたね。

龔：そうですね。ここまで成長した背景には、外的な環境の変化もあります。プロボノやボランティアに対する意識が高まったことや、コロナ禍でリモートワークが普及したことで、本業以外の時間を社会貢献に使ってみようという人が増えてきました。全員が本業を持つという性質上、私たちは設立当初からデジタルツールを活用し、オンラインでも参加できる形で活動していたので、そうしたニーズにフィットしていたのですよね。

変わらない〝青い炎〟

宮本：一方で、組織が成長しても変わることのない Living in Peace らしさもあります。「社会のことも、私事に」というタグラインに表されているように、社会課題を自分ごととして捉え、解決に取り組もうという人たちが集まっていることは、私がこれからも大事にしていきたいと思っていることの1つです。

龔：私はよく、Living in Peace のメンバーは“青い炎”の人たち、と形容するのですが、熱意や使命感で赤く燃え盛って突き進むというより、熱い想いを胸に持ちつつ、冷静かつロジカルに仕組みで課題解決に取り組む人たちが多いと感じています。だからこそ、課題の本質を見極めながら、本当に必要な支援、私たちならではの支援を常に考え、アップデートしていける。

宮本：確かに、ミッションステートメントでも示しているように、取りこぼされている課題に目を向け、団体外のさまざまなステークホルダーと連携しながら、より持続可能な仕組み、自走できる仕組みを築いていくためには、熱い想いとロジカルな思考の両方が大切ですね。

龔：メンバーが増えて多様になっても、根っこにあるものは共通しているので、組織としてのマインドセットは変わっていないように思います。

「熱い想いを胸に持ちつつ、冷静に、ロジカルに解決に取り組む――
だからこそ、私たちならではの支援をアップデートしていける」

より多くの人が課題解決に携われる社会に

宮本：組織が大きくなり、タスクを安定して回せる仕組みが整ってきた反面、メンバー間の関係性が希薄になってしまうリスクは高まっているかもしれません。本業では出会えない仲間と出会い、議論し、課題意識を分かち合えることも Living in

誰もがリーダーである組織

龔：Living in Peace では、メンバーの推薦に基づいて理事・代表理事を選出しています。つまり、選ばれる人たちはみんなから信頼されている人たち。Code of Conduct（P18 参照）を体現していることも大前提です。宮本さんをはじめ、新理事となったメンバーもそうした基準で選出されました。

「『誰もがリーダーである組織』としてバトンを引き継ぎながら活動を継続できるのは、組織としての強さ」

Peace の大きな魅力です。効率化を追求するあまり、そうした語り合いができるような余白を失わないようにしたいと考えています。

龔：やっぱり現場に行くことは大事ですよね。困難を抱えている当事者の方々と直接関わること、声を聞くことで、私たちが解決しなければならないことが何なのかを考えるヒントをたくさん得られるし、活動のモチベーションにもなります。

宮本：同時に、バックオフィスで長年活動してくれているメンバーがいるのもおもしろいところです。それぞれができることをやる――いろいろな関わり方の選択肢があることで、より多くの人が本業以外の課題の解決にも携われる社会にできる。Living in Peace をそうした場にしていきたいというのも、代表理事を務めるにあたっての想いです。

たが、今回の理事のみんなは宮本さんから見てどんな人たちですか。

宮本：スピード感と行動力がありますね。本業ではまだ若手という人もいますが、Living in Peace らしく年齢や経験によらず、これからの組織を一緒に考えていける頼もしいリーダーたちです。

龔：私自身、理事や代表理事として、本業では得られないような貴重な経験や人とのつながりを持つことができて、人として大きく成長したと感じています。この体験を次世代にぜひしてもらいたいと思ったことが、代表理事を交代した理由の 1 つでした。

宮本：Living in Peace は「誰もがリーダーである組織」であり、だからこそ代表や理事のバトンを引き継ぎながら活動を継続していくことができる。これは組織としての強さでもありますね。

龔：こうしてバトンを渡していきながら、次は 20 周年を祝いたいですね！

宮本：全員がプロボノで 20 年間活動し続けるというのはなかなかないことですよね。「さまざまな困難により可能性が制約されている人々も、等しくチャンスをつかめる社会を実現する」という目標を達成するまで、そのために続けるべきこと、やめるべきこと、新たに挑戦すべきことを見極めながら、受け取ったバトンを次へとつないでいきたいと想います。

Living in Peace のミッションステートメント

目指すもの

さまざまな困難により
可能性が制約されている人々も、
等しくチャンスをつかめる社会を目指します。

取り組み方

既存の枠組みでは取りこぼされる
社会課題を提起し、
多様な経験や知識を持つ人々とともに、
より効果的な解決の
仕組みづくりに挑戦します。

2025年11月からの理事体制

代表理事：宮本麻由（新任）
理事：大橋彩香（重任）、宮成 静（新任）、
安井規泰（新任）、徳原一希（新任）、角田真理（新任）

Living in Peaceの社会的インパクトモデル

Living in Peaceは、3つのプロジェクトと組織横断的な活動を通じて、
機会の平等の実現に取り組んでいます。

INPUT	PROJECT	ACTION	OUTPUT	OUTCOME		GOAL
プロボノ メンバー	ALL	社会人や学生が ともに活動する	メンバーが本業の知見 を活かして活躍する	活動を通じて 本業とは別の知識や スキルを得る	活動を通じて得た スキルを本業やさらなる 社会活動に活かす	社会のことも、私事に。 すべての人に、チャンスを。
事業 パートナー		情報発信	SNS 等を通じて活動を 発信する	より多くの人が 社会課題について知る	社会課題に取り組む人が 増加する	
寄付者の 皆様からの ご支援		外国にルーツを持つ こどもたちに社会と つながる多様な体験を提供	自然・文化・社会体験などの 多様な体験、大人や仲間 との出会いを提供する	支援対象者が社会との つながりを感じられる	支援対象者が ポジティブな将来を 描けるようになる	
		海外の農家支援	コーヒー農家の環境に 配慮した生産、及び適正 価格での販売を支援する	環境に配慮した生産の 実施および購入者の気候 変動に関する認知が進む	生産者及び購入者による 気候変動対策が進む	
出資者の 皆様からの 出資金	マイクロ ファイナンス プロジェクト	途上国の人たちの 金融包摂推進	自立した生活を送る ための金融アクセスを 提供する	支援対象者の生活水準 が向上する	支援対象者が 新しい挑戦ができる	
		途上国における ソーシャル ビジネス支援	途上国の社会的起業家が 事業拡大に必要な 非金融支援を提供する	支援対象者の ビジネスが拡大する	社会課題認知を進めると ともに、対象事業に携わる 人々の生計が安定する	
監事・ アドバイザーの 皆様からの ご支援	こども プロジェクト	困難な状況にある こどもたちへの 直接支援	こどもたちへ金銭的・ 非金銭的支援を行う	こどもたちが将来の ために学び続ける 環境を得る	こどもの将来の可能性が 拡大する	
		困難な家庭の課題 に取り組む団体 への間接支援	支援団体への金融的・ 非金融的支援を行う	支援団体の活動が 拡大する	より多くのこどもたち が支援を得ることが できる	
	難民 プロジェクト	日本に暮らす 難民の日本語習得 支援	日本で生活するための 日本語の基礎を習得 する支援を行う	支援対象者が日本語を 活かして日本社会での 関係性を構築する	支援対象者が日本で より活動を拡大 できるようになる	
		日本に暮らす 難民の就労支援	自立した生活を送るための 就労機会を獲得する 支援を行う	支援対象者の生活水準 が向上する	支援対象者の日本の 生活基盤ができる	

ミッション達成に向けた
マイクロファイナンスプロジェクトの取り組み

マイクロファイナンスプロジェクトは、金融アクセスの機会提供を通じた貧困削減を目指して活動しています。ミッションの達成に向けた取り組みと今後の展望をメンバーが語ります。

貧困脱する仕組みづくりに挑戦

銀行口座を作ったりお金を借りたりすることが当たり前の日本社会からは考えにくいのですが、事業主が金融サービスを受けられない国々が、東南アジアやアフリカにはあります。農業や自営業に携わる人々、とりわけ立場の弱い女性たちが事業を継続・発展させ、衛生的な環境に住むことすら難しくなることが起きているのです。そうした人々に融資の機会を提供し、貧困からの脱出をサポートするのが、マイクロファイナンスです。

当プロジェクトは、貧困層向けの小口融資などを行う現地のマイクロファイナンス機関（MFI）に、日本の投資家から募ったお金でファンドを組成し、継続的に事業の進捗を報告しています。

これまでカンボジア、ベトナム、ミャンマー、ケニアでプロジェクトを展開してきました。ケニアでは、他団体と協働してタクシー運転手に車の購入資金を融資する事業に携わっています。これまで所得の低い人への融資はほぼ閉ざされていたのですが、前払い額を下げた新ローンを他団体が提供、LIP がファンドを組成して、経済的な自立を目指すドライバーの未来に道を開くことができました。

ケニアのファンドは軌道にのってモニタリングの段階にあり、投資家向けのレポートを作成・配信しています。また MFI の職員向けに IT スキルの向上支援を行うこともあり、幅広く課題の解決に取り組んでいます。

新たなファンド組成目指し知識強化

会計事務所、金融機関、コンサルティングファームなどで働くプロジェクトメンバーは、既存の枠組みの中で取りこぼされる人々を救うため、日々勉強を重ねています。

メンバーは本業のビジネスにおいてさまざまな国に駐在しており、その優位性を活かして将来の可能性を探っています。ブラジルにいるメンバーは、現地のマイクロファイナンス市場やMFIの情報を集めています。ローカルな法規制についても調べ、日本のメンバーと連携しながら慎重にファンドの組成を進めています。

2025 年度は、日本のメンバーがサンパウロに出向き、ブラジル各地のコミュニティバンクを取りまとめる NGOと会合を持つ機会がありました。どんなニーズにどう答えていくか議論を交わすことができ、オンラインミーティングよりもぐっと距離の縮まる、有意義な時間となりました。

新たなファンド組成に向けてブラジルの NGO を訪問

いま、有志で知識強化に向け勉強会を開いています。この場を継続し、新たなファンド組成やモニタリング力の強化につなげていきます。またこれまで主要なテーマだったジェンダーに加え、障がい者や難民を対象としたファンドについても議論していく予定です。

齊藤眞史

本業は事業開発。以前の勤務地･仙台で別のボランティアに携わっていたが、東京転勤を機に、より主体的に活動したいと Living in Peace に入会した。マイクロファイナンスプロジェクトでは、ファンド組成の調査やファンドのモニタリングに関わっている。さまざまな業界で活躍する仲間に刺激を受けながら、より多くの人がチャンスをつかめる世界の実現に少しでも寄与したいと願っている。

ミッション達成に向けた こどもプロジェクトの取り組み

こどもプロジェクトは、「すべての子どもが、生まれや育ちのために自らの可能性を諦めなくてよい社会」をつくることを目指して活動しています。ミッションの達成に向けた取り組みと今後の展望をメンバーが語ります。

多様なメンバーが子どもたちの成長に伴走

こどもプロジェクトでは、親からの虐待やネグレクトを背景に児童福祉施設など社会的養護下で生活する子どもたちや、経済的困窮を抱える家庭で育つ子どもたちに十分な育ちを保障することを目指しています。

社会的養護下で生活する子どもたちは、親と暮らせないことで将来の選択肢が狭まってしまいます。また、施設退所後は経済的なセーフティネットがない状態で自立した生活をしなければなりません。こうした子どもたちに必要なのは金銭的な支援だけでなく、将来に対して前向きな見通しを持てるようになる機会やその過程を支える信頼できる伴走者だと私たちは考えます。

キャリアセッション事業では、多様な経歴を持つメンバーや、メンバーとつながりのあるゲスト講師がさまざまな業種・職種の仕事について講義とワークショップを行うキャリア教育プログラム「おしごとリップ」を通年で実施し、施設で暮らす子どもたちの視野を広げ、非認知能力を高めることに取り組んでいます。お金の教育事業でも、施設で毎月実施している「お金の教育講座」に加え、「進学シミュレーション」や「奨学金チャット Bot」といったツールによって、経済的自立に向けた総合的なサポートを提供しています。

それぞれの強みを活かし、より質の高い支援を

奈良県大和高田市では、古民家を改装した「永和町ベース」を拠点としたコミュニティづくりの事業を行っています。地域で子どもを取り巻く課題に取り組むさまざまな事業者や地元のボランティアの方々と連携し、多面的な活動を展開して、子どもたちに色々な体験機会や心地よい居場所を提供しています。

また、社会的養護においてより家庭的な環境での養育が重視されるなか、里親制度の認知と委託率を向上するため、東京都世田谷区の里親支援センターともがきの里親制度普及啓発を支援しています。

どの事業でも私たちが単独で直接的な支援を行うより、課題意識を共有する他の事業者や機関、地域の方々と協力し、それぞれの強みや特長を活かして支援の質を高めていくよう心がけています。今後は連携先を増やしていくほか、各事業間や他プロジェクトとの協働で支援を発展させていきたいです。

「永和町ベース」で運営するこども食堂「りっぷキッチン」

「おしごとリップ」をより多くの施設や他団体でも実施できるようマニュアル化したり、お金の教育の各ツールをオンラインで誰でも使えるようにしたりと、これまで積み上げてきた知見や経験を広く提供することにも注力しています。本業を持つメンバーがスキルと志を持ち寄って Living in Peace の活動を推進していくように、さまざまなプレーヤーが共通の課題に力を合わせて取り組むことが大切だと思っています。

安井規泰

本業は機械設計エンジニア。自身の就職活動でいろいろな人たちからのアドバイスをもらった経験からキャリア教育に興味を持ち、2021 年にこどもプロジェクトメンバーとして入会、キャリアセッション事業に携わる。2025 年 11 月、同プロジェクト担当の理事に就任。Living in Peace ではフラットな関係性で多様な視点・高い視座を持つ人たちと関わることができ、本業での立場の異なる関係者とのやりとりに役立っているほか、人としての成長にもつながっていると実感している。

ミッション達成に向けた
難民プロジェクトの取り組み

難民プロジェクトは、日本国内に暮らす難民の方々が
自立して暮らせる社会をつくることを目指して活動しています。
ミッションの達成に向けた取り組みと今後の展望をメンバーが語ります。

日本語学習の機会を提供、自立を支援

難民とは、紛争や迫害により祖国を離れた人たちです。自国にとどまる国内避難民も含め、その数は2024年に過去最高の1億2,300万人に達しました。世界各地の紛争は絶えず、日本にもアフリカやアジア、中東からやってきた人たちがいますが、諸外国に比べて難民認定率は高くありません。住む場所と働き口をなんとか見つけ、生活基盤が整ったとしても、母国で担っていたような仕事にはなかなかつけないのが実情です。

生まれ持ったルーツに左右されず、誰もがチャンスを得られる社会の実現を目指したい――私たちはそんな思いから、難民背景を持つ方々が感じるさまざまな壁をなくすべく、日々課題に取り組んでいます。

1つは日本語学習支援です。多くの日本企業は日常会話とある程度の読み書きができる日本語レベルを求めています。私たちは日本語学習プログラムを提供する4団体と提携し、受講生の学習フェーズやニーズに応じて学べる環境を創出しています。年に1度希望者を募集し面接をした上で選考を行い、ムスリムの女性に「男性と机を並べての学習は可能ですか」と尋ねるようなきめ細かい聞き取りもします。年度末には卒業イベントを開き、1年間の学習の成果を発表します。

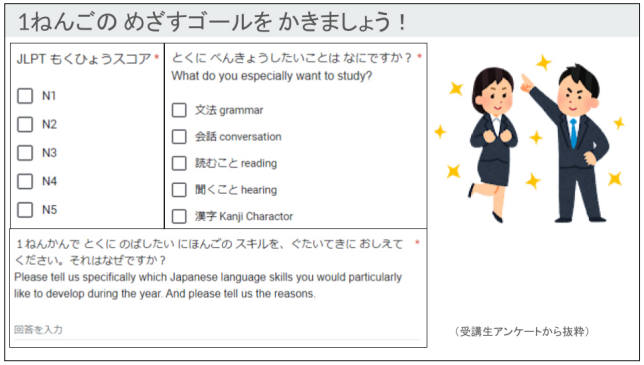
学習者の累計は138人となり、応募者も年々増え、2025年度は過去最高の90人弱に達しました。より多くの方々に日本語学習の機会を届けるため、今後は提携校を増やしていく予定です。

情報格差の壁をなくすキャリアサポート

もう1つはキャリアサポートです。新卒大学生の就活はどう進むのか、面接ではどんな質問にどう答えればよいのか、といった疑問を持つ難民背景の大学生に、人事や面接官の経験者を含む多様なメンバーが、社会人としてのスキルを活かして伴走支援をしています。キャリアセミナーで自己分析のコツを教え、希望者との個別面談も実施して、これまでに累計10人が内定を獲得しました。

2025年度はAIを活用した就活マニュアルを作成しました。エントリーシートの推敲をさせたりフレッシュな視点を提供してもらったりと、今や就活にAIは欠かせません。マニュアルではどんな特徴があり、どんな場面で効果的に使えるかを具体的に紹介しました。年間を通じて利用できるよう、資産として残していく仕組みづくりを進めます。

現在大学生をメインに支援していますが、高等教育の進学前にも日本語の壁によって授業についていけない、ドロップアウトしてしまうなどの課題があります。そのため、これまでの実績や経験を活かした中高生への支援の可能性を模索しているところです。



目標を立て、伴走しながら日本語学習を支援

大橋彩香

本業は営業企画。大学時代に難民に関係する活動に参加し、社会人になっても関わりたいと Living in Peace に入会。志を同じくする人と、本業と同じレベルの熱意で活動できるのが魅力と感じている。プロジェクトリーダーや理事を務めた経験から、本業でも意思決定の際の論点整理などを業務に生かせていると実感。今後はさらに事業を発展させ、日本で暮らす難民へのインパクトを大きくしたいと考えている。

ミッション達成に向けたプロジェクト横断の取り組み

子どもの体験プログラム「おでかけリップ」

こども・難民プロジェクトが協働で始めた「おでかけリップ」は、家庭環境に起因する子どもの体験格差の解消を目指して活動しています。ミッションの達成に向けた取り組みと今後の展望をメンバーが語ります。

社会との接点を増やす「非日常体験」を提供

アウトドアやテーマパークでの体験、友達との宿泊など、学校外での特別な「おでかけ」は、子どもたちにとってとてもワクワクするものです。「おでかけリップ」では、経済的困窮や社会的孤立などさまざまな要因から学校外での体験機会が少ない子どもたちに、自然・社会・文化に触れる非日常体験を提供しています。

プログラムを始めたきっかけは、コロナ禍で実施した外国ルーツの困窮家庭への聞き取り調査でした。学費が手当できない、学用品が用意できないといった経済的な問題のほか、親が地域コミュニティとつながりを持てず、日本語が不自由なため外出に気後れするといった事情が見えてきました。

自然環境に触れる体験は子どもの発達や成長に重要です。知らない人との外出は新しい友をもたらし、プラネタリウムやお城の見学といった実体験は視野を広げてくれます。どうやって学びを広げ、楽しんでもらえるか…。プロジェクトのメンバーは勉強会やこまめな情報共有で課題を包括的にとらえ、よりよい運営法を考えています。コンサルティングやIT関連、人工衛星の開発などさまざまな職業や年齢のメンバーの多角的な視点が強みになっていると感じます。

ポジティブな未来を描けるように

2024年度からは外国ルーツの子どもに加え母子生活支援施設出身の子どもも対象とし、プログラムを継続しています。ひとり親家庭は休日に出かける時間的・経済的な余裕がなく、子どもは学校外での体験が少なくなりがちだからです。

2025年は小田原へのプチ旅行でかまぼこを手作りしたり、大人気の大阪万博に出かけたりしました。一部の回には対象者の親やきょうだいも参加。おでかけした時に書いてもらう日記からは、子どもたちのフレッシュな喜びがあふれ出ています。日常から離れて外出を楽しみ、我が子の成長を感じ取った親からも、嬉しい声が寄せられています。

一度限りではなく継続して参加してもらうことで、最初は日記をほとんど書けなかった子どもがたくさん書いてくれるようになったり、人見知りが減って挨拶や質問が増えたりと、一人一人の成長を肌で感じることができ、私たちも大きなやりがいを感じています。

自然に触れる体験も貴重な成長の機会に

今後は、より多くの子どもがポジティブな未来を描けるよう、子どもたちが持つ背景への理解を深め、振り返りやワークショップで丁寧にフォローしていくほか、体験の幅を広げるために企業との連携も模索していきます。また自己肯定感や集中力、忍耐力やコミュニケーション力といった非認知能力の向上や、自発的な学びに向かう力の醸成を目指します。

矢口摩美

本業は看護師。学生時代に世界の貧困を支援するボランティアに携わり、社会人となって国内の貧困問題を知る。何か役立てることがないかと考えた際、Living in Peaceの「すべての子どもに、チャンスを。」との理念に共感して入会した。おでかけリップでのやりがいは、子どもの成長を間近で支え、可能性を引き出せること。また多様なバックグラウンドを持つメンバー、寄付者、企業の方々のおかげで活動できていることに感謝している。

ミッション達成に向けたプロジェクト横断の取り組み

グリーンビジネス支援

マイクロファイナンスプロジェクトから派生したグリーンビジネス支援は、気候変動の影響による農家の貧困問題の克服を目指して活動しています。ミッションの達成に向けた取り組みと今後の展望をメンバーが語ります。

「気候変動による貧困」の解決に向けて

気候変動による熱波や山火事、少雨などが私たちを脅かしています。自然や社会インフラを破壊するだけではなく、作物を育てる農業に大きな影響を及ぼし、生産量が激減して貧困に陥る人々が現れています。こうしたリスクは20年ほど前から認知され始め、広く問題化してきたのは最近のことです。

食糧生産に携わる一部の企業では独自の取り組みが始まっていましたが、「誰でも等しくチャンスをつかめる社会」を目指す私たちにとっても、これは取り組むべき重要な課題だと考えました。そこで、以前から環境問題に関心を寄せていたメンバーが集まって、グリーンビジネス支援を始めました。

本業を持つメンバーが農家に直接アプローチすることは難しいので、インドネシア・バリ島で農家を支援する団体su-re.co（シュアコ）と手を組みました。インドネシアでは、人口2億7,000万人のうち30%が農業に携わっています。Living in Peaceの元メンバーが立ち上げたsu-re.coは、気温上昇や降雨量の減少に苦しむ農民に高温に強いコーヒー豆やカカオ豆栽培への転換を促し、気候に合わせた農法を指導しています。そして、彼らが育てた農作物を高い還元率で買い取り、チョコレートやコーヒーとして商品化します。私たちはこうした商品の日本での販売を後方支援してきました。営業経験のあるメンバーがホテルに電話で営業したり、店舗でコーヒー豆をひいて味わってもらう実演販売をしたりと、商品を広めて農家に利益が及ぶよう尽力してきました。

su-re.coの支援を通じてバイオガス生成キットを導入した現地の農家

課題の認知を広め、多くの人を巻き込みたい

いま、グリーンビジネス支援は「基盤づくりと仲間づくり」の段階にあります。これまでの活動で得た学びを生かしながら、より多くの方にこの課題を知って関わってもらうための土台を整えているところです。

具体的には、月1回の勉強会を通じて、メンバーが関心のあるテーマについてリサーチし、発表する機会を設けています。2025年は、米の価格高騰で注目され始めた日本の農家の現状、フェアトレードとサプライチェーンに潜む人権侵害、su-re.coが扱っているバイオガスなどについて取り上げました。また四半期ごとのワークショップでは、参加者と一緒に気候変動と貧困の問題について考え、対話する場を作っています。

su-re.coとは販売支援の拡大に向け次のマーケティング戦略を検討している段階です。さらに、国内外の新たなパートナーとの連携も模索しています。それぞれが持つ強みを活かしあいながらよりインパクトのある取り組みができるよう、可能性を広げたいと考えています。

信崎謙太

本業は電力の需給管理。創業者・慎泰俊の著書『働きながら社会を変える』を読んだのがきっかけでLiving in Peaceに入会。みんなで少しずつ時間を出し合って社会を変えていこうというアイデアと、本業を持つ者だからこそできることを探して取り組んでいく姿勢にひかれた。こどもプロジェクト、広報、グリーンビジネスなどを経験し、他者の役に立てていると思う瞬間がやりがいとなっている。

2025年の活動ハイライト HIGHLIGHTS

※特記のない限り、Living in Peace の事業年度である 2024 年 8 月～2025 年 7 月の期間を指します。

永和町プロジェクト

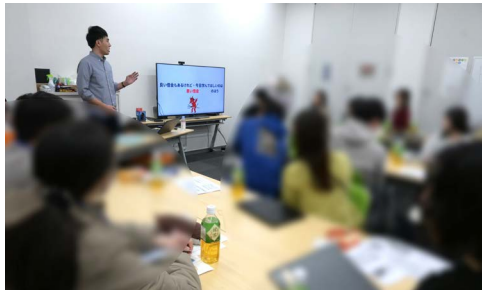
奈良県大和高田市の「永和町ベース」において、各事業者や地域ボランティアの方々との連携のもと、以下の活動を実施

- こども食堂「りっぷキッチン」を 21 回開催（うち 11 回は放課後自習室「りっぷらいぶらり」と同日開催）、のべ 893 名の子どもたち・地域の方々が参加。
- フードパントリーを 5 回実施、のべ 569 世帯にお米、レトルト食品、お菓子などを配布
- 5 月から始まった新企画、ボードゲームを活用した居場所「りっぷボドゲの輪」を 3 回開催、のべ 38 名の子どもたち・地域の方々が参加。
- このほか、ヤングケアラーのための子どもの居場所「おはようさろん」、プログラミング教室「りっぷラボ」等の居場所事業を 40 回開催、のべ 716 名の子どもたちが参加

（左）フードパントリー（右上）放課後自習室「りっぷらいぶらり」（右下）「りっぷボドゲの輪」

お金の教育

児童養護施設を退所予定の高校生を対象にお金の知識を育む「お金の教育講座」を実施



「お金の教育講座」の様子

- 既存の児童養護施設 3 施設（関東・関西）に加え、新たに 1 施設と NPO1 法人と連携。
- 対面開催に加え、匿名参加が可能な Zoom ウェビナーの定期開催を開始し、YouTube でも公開。
- 大学・専門学校進学にかかる費用をオンラインで計算できる「進学シミュレーション」、奨学金情報を AI で提案する「奨学金チャットボット」の累計利用者数のべ約 8,500 人。

「お金の教育講座」を受講した高校生の声

- 社会保障について知ることができてよかったです。
- よく考えると浪費をしていたのだと気づけた。
- 実例が多く、身近なテーマとして伝わった。とてもわかりやすい講座でした。

キャリアセッション

関西では生駒学園・高鷲学園の 2 施設合同で「おしごとリップ」を実施

関東・関西の 4 つの児童養護施設で暮らす子どもたちを対象に、将来の職業の選択肢を広げるとともに非認知能力の向上を目指すキャリア教育プログラム「おしごとリップ」を月 1 回実施

- 2024 年 4 月～ 2025 年 3 月は関東で 13 名・関西で 15 名の子どもたちが参加。
- 公務員、IT、ヘルスケア、製造業、出版、不動産、ソーシャルビジネスなど多様な業界を取り上げて講義およびワークショップを実施。
- プログラムの展開：熊本の NPO 法人（優里の会）の 里親子向けキャリアプログラム実行支援を通じ、プログラムの他団体への普及・ノウハウ共有も推進。

「おしごとリップ」を実施した施設職員の方々の声

■子どもたちの間でアルバイトや就職など働くことに関する話題が日常的に多く聞かれるようになっています。アルバイト探しにおいても「こういうアルバイトはないかな」と具体的に職種を挙げて話す場面が増えています。

■以前はおしごとリップを体調等により欠席してしまうことがよくありましたが、今年度は活動を毎回楽しみに参加できています。これはずっと見てくれているスタッフや、一緒に活動する子どもたちとの信頼関係ができた結果だと感じています。継続して何かに取り組むことが確かな成長経験となっています。

LIP-Learning

日本に暮らす難民の方々の日本語学習を支援

- 4 つの日本語教育機関（TIJ 思徳会、ISI 日本語学校、にわとりの会、27th）と引き続き提携。
- 41 名の奨学生が受講、累計で 138 名に。

「LIP-Learning」の受講生が講師とともに日本文化を体験する対面イベントを開催

受講生の声

私は 2025 年 2 月から勉強を始めました。先生たちは親切で、やさしくて、英語でもよく説明してくれます。勉強の時間とコースも自由で、学生に合っています。これは私の 1 年目です。このプログラムは 2 年間まで続けることができると聞きました。だから、これからも続けたいです。LIP プログラムに参加できてとても満足しています。このチャンスをくださって、ありがとうございます。

就労支援

RHEP プログラムの
学生向けセミナー

日本に暮らす難民の大学生の就職活動を伴走支援

- 2025 年 1 月～ 12 月の内定者数 1 名、現在まで累計 10 名の内定を獲得。
- 現在 1 名の学生の伴走支援中。
- UNHCR 難民高等教育（RHEP）プログラム対象学生向けにセミナーを 2 回実施。
- 就職活動における生成 AI 活用マニュアルを作成。

支援した学生の声

大学 2 年生の終わりごろから就職活動を始めました。基本的な就職活動のポイントは理解していたものの、面接で何度も不採用が続き、自分に合う企業を見つける希望を失ってしまいました。そんな中、Living in Peace の皆さんが再び私を真剣に受け止めてくださり、本当に言葉では表せないほどたくさんの支援をしてくれました。何度も励ましてくださり、親身になってサポートしてくれたおかげで、ついに自分に合った就職先を見つけることができました。そして今では、その会社で働き始めてもうすぐ 1 年になります。いただいたアドバイスや知識は今でも大切にしており、心から感謝しています。

子どもの体験プログラム「おでかけリップ」

経済的困窮や社会的孤立などさまざまな要因から学校外での体験機会が限られている子どもたちに、非日常体験を提供するプログラムを実施

- これまで団体とつながりのある子どもたちに声をかけて実施していたプログラムを公募制にし、対象を外国にルーツを持つ子どもたちから母子生活支援施設出身者にも拡大。
- 年間で 5 回のプログラムを実施し、うち 2 回は外部団体と連携。外国ルーツの子どもと母子生活支援施設出身の子ども、計 15 人（未就学児～中学 3 年生）が参加。
- 1 回目：横瀬町で自然体験 ／ 2 回目：小田原プチ旅行／ 3 回目：アイスショーの見学と公演を支える方々へのインタビュー／ 4 回目：大阪旅行／ 5 回目：日本科学未来館の見学とワークショップ

大阪旅行では 1 日目に万博記念公園と国立民族博物館、2 日目に大阪・関西万博へ

プログラムに参加した子どもたちの声

- 日本のいろいろな場所や歴史に興味を持った。
- 国が違う人と話して視野が広がった。
- 万博が一番楽しかったです。けいけんしたこともないことにいっぱい時間をかけて楽しめた。

プログラムに参加した子どもたちの保護者の声

- 将来に向けて意識が出てきたように思います。
- 1 人親で反抗期の子供を受け止めるのは、エネルギーの消耗が激しくて疲れていたので助かりました。
- おでかけリップによる子どもの変化はたくさんあります。娘はおでかけリップを通じて日本の様々な生活スタイルや将来できる仕事を発見しました。

会計報告

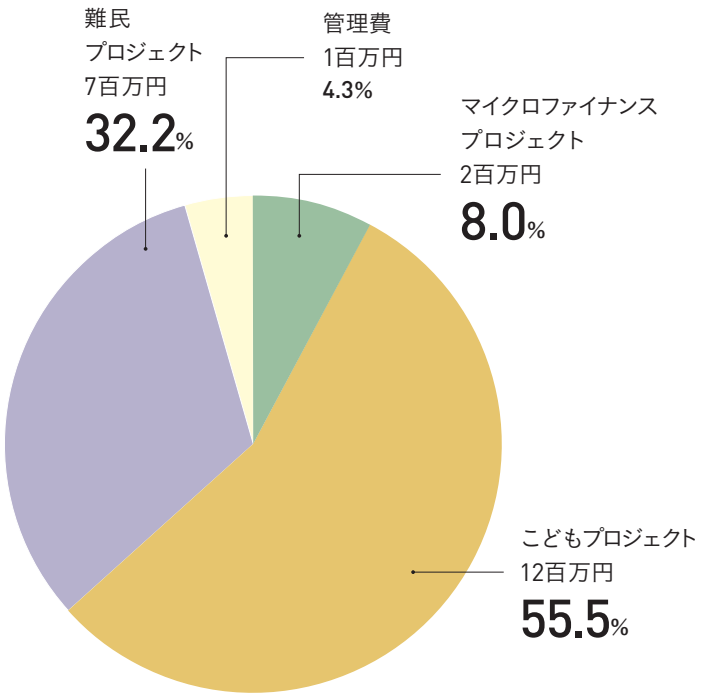
活動計算書

（単位：円）

科目	2024年7月期 ①	2025年7月期 ②	前年同期比②－①
Ⅰ 経常収益			
1. 受取会費	852,500	731,000	▲ 121,500
2. 受取寄附金	35,499,138	35,573,858	74,720
3. 事業収益	272,330	675,485	403,155
4. その他収益	29,839	149,723	119,884
経常収益計	**36,653,807**	**37,130,066**	**476,259**
Ⅱ 経常費用			
1. 事業費			
（1）人件費	0	0	0
（2）その他経費	21,857,845	20,522,012	▲ 1,335,833
事業費計	21,857,845	20,522,012	▲ 1,335,833
2. 管理費			
（1）人件費	0	0	0
（2）その他経費	918,269	921,558	3,289
管理費計	918,269	921,558	3,289
経常費用計	**22,776,114**	**21,443,570**	**▲ 1,332,544**
税引前当期正味財産増減額	**13,877,693**	**15,686,496**	**1,808,803**
Ⅲ 法人税等	70,000	70,000	0
当期一般正味財産増加額	13,877,693	15,686,496	1,808,803
前期繰越正味財産額	75,540,300	89,347,993	13,807,693
次期繰越一般正味財産額	**89,347,993**	**104,964,489**	**15,616,496**
受取寄付金	0	0	0
一般正味財産への振替額	▲ 4,735,424	▲ 10,129,455	▲ 5,394,031
前期繰越指定正味財産額	15,400,000	10,664,576	▲ 4,735,424
次期繰越指定正味財産額	**10,664,576**	**535,121**	**▲ 10,129,455**

経常費用の内訳

2024 年度は、前年度指定正味財産からの振り替えもあり、経常収益は前年並みの37百万円となりました。
経常費用は、こどもプロジェクトにおけるこども食堂の活動拡大等の一方で、奨学金事業の終了により事業費が減少したことで、全体では前年比1百万円減の21百万円となりました。



事業費の主な内訳

- 永和町プロジェクト：7百万円
  こども食堂・フードパントリーの食材購入のほか、プログラミング教室をはじめとするさまざまなコミュニティ活動の講師料などに使用しています。
- LIP-Learning：3百万円
  日本語学校の授業料など、日本に暮らす難民の方々の日本語教育サポートに必要な費用に充当しています。
- キャリアセッション「おしごとリップ」：2百万円
  セッション実施の際の会議室利用料や交通費などに使用しています。
- こどもの体験プログラム「おでかけリップ」：1百万円
  プログラム実施の際の体験施設利用料や交通費などに使用しています。

なお、Living in Peace は、メンバー全員が他に本業を持ちながらパートタイムで活動しているため、人件費は発生していません。

企業からの支援

Living in Peaceの活動は、企業の皆様からのご支援にも支えられています。

インヴァスト証券株式会社	インヴァスト証券
MFSインベストメント・マネジメント株式会社	MFS
コストコホールセールジャパン株式会社	COSTCO WHOLESALE
株式会社ファイントゥデイ	finetoday
メットライフ生命保険株式会社	MetLife メットライフ生命

（50音順）

寄付のご案内

マンスリー・サポーター

マンスリー・サポーターは、毎月定額で継続的にご寄付いただくプログラムです。団体全体もしくは各プロジェクトに対し、月々 1,000 円からクレジットカードによる継続寄付をしていただけます。ご支援いただいた皆様には、メールでの活動報告のほか、イベント情報などを優先的にご案内いたします。

登録はこちらから
https://www.living-in-peace.org/donate/

スポット寄付

月々の継続寄付のほか、ご都合のよいときにクレジットカードまたは銀行振り込みで寄付いただくことも可能です。金額もご自身で設定いただけます。

クレジットカードは左記のマンスリー・サポーターと同じウェブページからワンタイム寄付を選択ください。

銀行振込は、下記宛にお振り込みください。

振込先

楽天銀行第一営業支店（251）
口座番号　普通口座　7282130
口座名義　特定非営利活動法人 Living in Peace 共通口座
カナ表記　トクヒ）リビング イン ピース キョウツウコウザ

※ Living in Peace は認定 NPO 法人です。皆様の寄付金は税制上の優遇措置の対象となり、寄付金控除の適用を受けられます。
※ 寄付額の一部は、団体維持運営費に充当させていただきます。

Living in Peace の Code of Conduct（行動基準）

感謝の気持ちを持つこと	私たちは常に感謝の気持ちを忘れることなく他者と接し、行動します。
他者に共感する気持ちを持つこと	私たちは他者の置かれた状況や環境に関心を持ち、思いを馳せ、自分のことのように感じ行動します。
プロアクティブであること	私たちは活動に積極的に参加し、問題に対してはよく考えると同時に、実際に行動を起こします。
多様性を尊重すること	私たちは組織発展の不可欠な要素として多様性が必要であることを深く認識し、多様な属性を持つ人の参加や多様な貢献の仕方を受け入れ、推進します。
謙虚であること	私たちは相手を思いやり、敬う気持ちを持って他者と接します。 私たちは常に内省に努めることで、自分を客観視します。 私たちは好奇心を持って自らに不足する知識や経験の吸収に努めます。 私たちは自分の行動に誤りがあり、またはそれを指摘された場合には素直にそれを認め、速やかに訂正します。
大志を持つこと	私たちは高い志を持ち、その実現に向けて地道な努力も厭わずに取り組みます。 私たちは初心を忘れることなく、原理原則にぶれることのない行動を取ります。
オープンであること	私たちはオープンな場で議論を行い、本人の前で行わない異議申し立ては禁止します。 私たちは全ての意思決定は公開の場で行うことにより、ポリティクスを排除し、偏った意見形成を行わないこととします。 私たちは意見の表出は建設的な提案として行い、反対意見がある場合は代替案を提示します。
前向きであること	私たちはできないことについて後ろ向きの言動を行わず、できることで最善のことを考え、実行します。 私たちは明るく・元気よく・楽しく、をモットーに行動します。
仕事に責任を持つこと	私たちはLiving in Peaceにおける自身の役割・仕事について責任感を持ち、最後までやり遂げます。
本業／学業を大切にすること	私たちは、本業／学業に重く価値を置き、そこにおいて秀でることができるよう最大限の努力をします。 私たちは、Living in Peaceの活動によって本業/学業を犠牲にしません。

これらの行動基準を実践し、継続して活動できる、熱意を持ったメンバーを求めています。
まずはオンラインでの定例ミーティング見学にお越しください。詳細はこちらから。

私たちの歩み

Living in Peaceは2007年の設立以来、「すべての人に、チャンスを。」という
ビジョンの実現に向けて活動の幅を広げてきました。

2007	■ 4名の有志による貧困の終焉のための勉強会を開始 ■ 勉強会をきっかけに Living in Peaceを結成
2009	■ NPO 法人格を取得 ■ 日本初のマイクロファイナンスファンドを企画（ミュージックセキュリティーズと提携） ■ カンボジア 第1ファンドで約 2,500万円の調達に成功 ■ こどもプロジェクトがスタート、児童養護施設「筑波愛児園」へ訪問
2010	■ 児童養護施設の建て替え支援事業とキャリアセッション事業を開始 ■ カンボジア 第2ファンドで約1,500万円の調達に成功
2011	■ カンボジア 第3ファンドで約 3,000万円の調達に成功
2012	■ 認定 NPO 法人の認定取得 ■ 児童養護施設「筑波愛児園」の建て替え支援を実施 ■ ベトナム 第1ファンドで約 2,500万円の調達に成功
2013	■ カンボジア 第4ファンドで約 4,000万円の調達に成功
2014	■ 「Chance Maker 奨学金事業」を開始 ■ ベトナム 第2ファンドで約 4,000万円の調達に成功
2015	■ 児童養護施設「鳥取こども学園」建て替え支援を実施 ■ カンボジア 第5ファンドで約 6,000万円の調達に成功
2016	■ 関西を拠点とした活動を開始
2017	■ 児童養護施設「広島新生学園」建て替え支援を実施
2018	■ 慎泰俊が理事長を退任。中里晋三・龔軼群が代表理事に就任 ■ 永和町拠点が奈良県大和高田市に完成 ■ 一般社団法人 MY TREE への支援が決定 ■ 難民プロジェクトを発足し、難民学生の就職支援を開始
2019	■ ミャンマー第1ファンドで約4,000万円の調達に成功 ■ 「お金の教育事業」を開始 ■ 児童養護施設「東京育成園」と里親制度普及啓発事業の協業を開始 ■ 日本に暮らす難民への日本語学習の機会を提供する「LIP-Learning」を開始
2020	■ ミャンマー第2ファンドで約2,500万円の調達に成功 ■ インドネシアの su-re.co との共同事業を開始 ■ 難民学生の就職支援にて国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）との業務提携を開始 ■ 東京大学と「移民・難民二世のキャリア形成に関する調査研究」を開始
2021	■ 日本児童相談業務評価機関（J-Oschis）の創設に協力 ■ 外国籍の子育て世帯に対する緊急支援を実施
2022	■ ケニアでのファンドを組成 ■ 建て替え支援の資金調達を完了
2023	■ 外国ルーツのこどもたち向け体験プログラムのトライアルを開始 ■ Cutural Diversity Indexのベータ版を作成
2024	■ こどもの体験プログラム「おでかけリップ」を開始 ■ Cultural Diversity Indexに基づく認証制度の運用を開始（現在は一般社団法人Cultural Diversity 推進協会に移管）

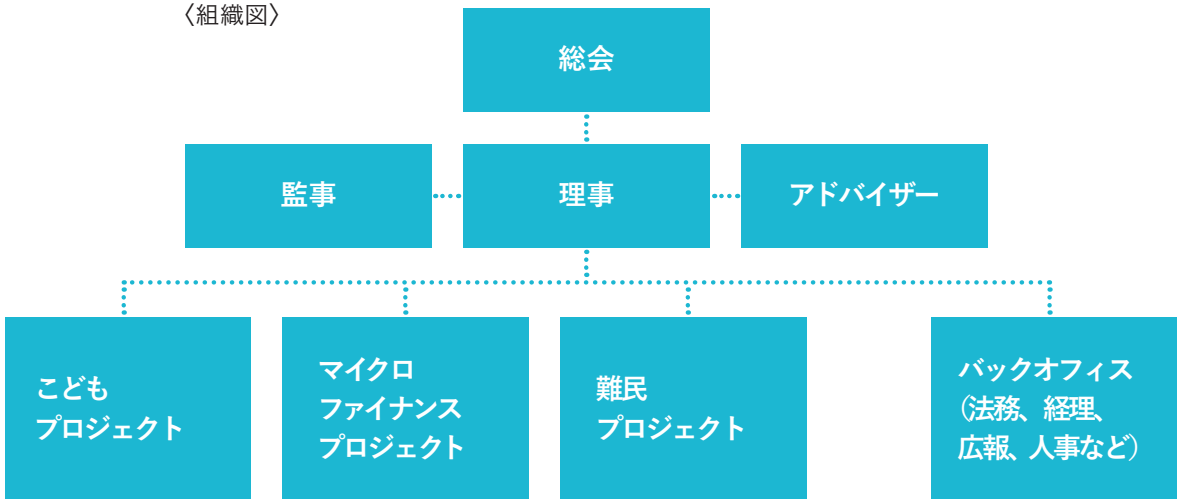
■ Living in Peace ALL プロジェクト　■ こどもプロジェクト　■ マイクロファイナンスプロジェクト　■ 難民プロジェクト

団体概要

名称：認定特定非営利活動法人 Living in Peace
2007年10月28日 結成
2009年4月13日NPO法人格を取得
2012年7月16日 認定NPO法人を取得

団体所在地：〒103-0026　東京都中央区日本橋兜町 5–1
創設者：慎泰俊
代表理事：宮本麻由
理事：大橋彩香、宮成静、安井規泰、徳原一希、角田真理
監事：鈴木瞳
アドバイザー：
小森哲郎（株式会社ファイントゥデイ 代表取締役社長兼 CEO）、
河口真理子（立教大学 21 世紀社会デザイン研究科 特任教授）、
五十嵐裕美子（五十嵐綜合法律事務所弁護士）
メンバー：133 名（2025 年 12 月現在）

〈組織図〉



© 2026 Living in Peace